

Title	文学研究とテキスト・ データベースFRANTEXTについて
Sub Title	La Base de données textuelles et les Recherches littéraires : L'exemple de FRANTEXT
Author	片木, 智年(Katagi, Tomotoshi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1992
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.60, (1992. 3) ,p.392(55)- 413(34)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	中田美喜教授追悼論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00600001-0413

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

文学研究とテキスト・データベース FRANTEXTについて

片 木 智 年

このほど慶應義塾三田情報センターにフランス国立国語研究所（INaL F）のテキストデータ・ベース，FRANTEXTが導入された．文学，語学にとどまらず人文科学研究一般に新たな地平をかいま見せてくれるこのテキスト・データベースの現状と可能性について，ここでは少々場違いな感もあるが，簡単に触れてみたいと思う．なお本稿は二部構成になっており第一部でテキストDBと文学研究に関する簡単な記述，第二部でFRANTEXTの主要コマンドが解説されている．FRANTEXTについての情報をもっぱら望まれる方は第一部を飛ばして第二部のみを直接参照されたい．

（FRANTEXTを日本語で解説するに当たってはフランスCNRS（国立学術研究センター）のEveline MARTIN氏の快諾を得た．スケジュール上，来日した氏に直接お会いすることはできなかったのだが，91年7月より導入されたばかりの新しい検索システムについての手書き原稿資料を頂いた．またパリのCNRSでは，本稿の執筆時ではまだ出版されていないCD・ROM版DISCOTEXTに実際に触れ説明を受ける機会を得た．ここに併せて感謝の意を表わしたいと思う．なおFRANTEXTの検索システム，STELLAはJacques DENDIEN氏による．）

I. テキスト・DBの現状と文学研究への寄与

フランス国立国語研究所 (INaLF) のテキストDB, FRANTEXTの例

*FRANTEXTはCNRS, フランス国立国語研究所 (INaLF) によって開発されたテキストDBである。世界中の任意の端末機から電話回線をとおしてアクセスできるようになっており、文学作品その他3000タイトル以上のテキスト内容が電子信号の形でストックされている。収録テキスト数は現在も膨らんでおり、おもに、フランス語学、文学、歴史等、人文諸科学に関する研究調査を行なう上で、資料的にも、方法的にも大きな意味を持つものと考えられる。実際にテキスト内容がストックされたホストコンピュータはもちろんフランスにあり、検索システムも基本的には語彙検索を中心にしたものだが、かなり柔軟な形の作業ができるように工夫されている。

*このデータベースは公的な性格を持つ各種研究、情報機関に向けて公開されており、データベースの使用契約は個人、あるいは研究グループ単位ではできないことになっているのだが、慶應義塾では主として「三田情報センター」の方々の御尽力で埼玉大学に続いて日本では2番目に使用契約を結ぶことができた。本年10月から既に三田レファレンスルームに設置された端末機を通してアクセスできるようになっている。他の研究機関でも大学図書館を中心にこれから導入されるケースが増えて来ると考えられる。(又、日本でFRANTEXTが知られるようになったのは埼玉大学、霧生和夫氏の日本フランス語フランス文学会での特別発表を初めとした尽力に負うところが大きい。)

テキスト・DBと文学研究

テキスト・DBと文学研究の関連について述べる上で、いったいこの新

しい形で整理，ストックされたテキスト情報にどんな意義があるのかを簡単に述べておく．ワープロ等の情報機器を使用されている研究者，学生諸氏の数はここ数年で飛躍的に増えており，文字情報を簡単にストックしてディスプレイ上で修正加工，印字，さらには電話回線等を通じて送信し得ることの便利さは周知のところであろう．こう考えると，コンピュータによるテキストDBの意義は，実は音声や活字といった物理的な制約から言葉を解放し，より自由で柔軟な形，つまりより「情報」という言葉の本来的な意味に我々を近づけたということにあるといえるだろう．このことは情報に対するランダムアクセスや並列処理も可能となったことを意味する．考えてみれば，音声や活字で運ばれた「言葉」も，結局頭の中で人間が処理する際には「情報」になり，この情報に対して記憶や言語システムとのつきあわせ，意味の連想などの並列処理が行なわれているのである．

さて，このテキストDBが「文学研究」にどのようなパースペクティヴを開いてくれるかなのだが，「文学研究」とはどういうものであるか，ましてどうあるべきものであるかという問いに対して一定の答えが存在しない以上，ここでは最小限の提案にとどめて置きたい．（「文学研究」を作り出し，それを消費するある社会制度が問題になるわけだが，教条的に「文学研究」のあるべき姿などというものを規定していく正統な制度が存在するのかどうか，ましてそれが大学であるかどうかという問いには，誰も答えることは出来ない．従来の「文学研究」，あるいは，「批評」を模倣しながら，変奏していくことがとにもかくにも今日の「文学研究」の現実を創っているということを思っていたきたい）したがってここでは，テキストDBを使用すること自体が「文学研究」につながっていくのではなく，テキストDBの情報をより柔軟に処理することが文学研究のための新たなプラットフォームを作り出すと考えておこうと思う．ここでは文学もまた他のテキスト同様自然言語による情報であると考えうるからである．またテキストの背後に，存在する（あるいは不在の）無数のテキストの網の目を探り，そこに無数の声を聞こうとするのはテキストに対する極めて今日的

な考え方だが、テキストDBこそが1テキストの背後に隠れたこの無数のテキストの錯綜を我々に生きさせてくれる手段を提供するという意味で「書物」の限界をはるかに越えるものであろう。

パースペクティヴ

＊それではいったい紙や肉声のあしかせから離れた文学テキストが、どんなアプローチの対象となりうるか。ここでは伝統的分割にしたがって下記のような順序で簡単にそれぞれの可能性について触れて行く。

- ・音韻的研究
- ・シンタクスの解析
- ・意味について
- ・語彙的研究

＊音韻的な特徴の分析は容易

あるコーパスについてどういう音の単位がどういう現われ方をするか。

どういう音の組合せがどういう現われ方をするか。

また、これに付随して例えば韻律の量的研究も可能であろうし、あるコーパスの音韻的な特徴とシンタクス、意味との関連なども研究対象となるだろう。

＊シンタクスの解析

シンタクスの自動解析も現在は可能となっている。もちろん、完全と言うには程違いがすでに数多くの自動翻訳、さらにはパソコンレベルで簡単に使えるシンタクス・チェッカーの隆盛を思っただけであれば良い。

極めて単純化していえば、各单位毎に統語的なプロパシーを記述した辞書を作成しておいて、それを参照しながらプログラムはシンタクスの構造を

解析していくわけである。もちろん構文的な曖昧さを解決するためのルールの完成が必要になってくる。有名な曖昧文 “La vieille ferme la porte.” を思いいただきたい。この 5 語だけでいったいどれだけの構文解釈が可能かを考えてみればシンタクス解析が抱える困難が想像できる。いかに厳密に組み上げられた構文理論でも現実のコーパスを分析していく上では次々と不備が現われて来るのはいうまでもない。

こういった理由から、むやみにシンタクス理論を複雑にしてシステム全体を重くしていくよりは、個々のケースに対してプログラム分岐として対応するようなシステムのほうが現実的ではないかという考えが出て来るのも当然だろう。シンタクス理論万能主義をすてて、ローカル文法の充実をはかることが必要となってくるのである。例えばパリ 7 大学の言語自動処理研究室で採用されたアプローチは非常に現実的なものに思われる。ローカル文法を充実させると同時に複合語の概念をひろげていくことによって構文的な例外に対処していこうと言うものである。

コーパスのもつシンタクス上の特性、分布などの分析がこういった努力によって可能となるのである。

*意味について

コンピュータに意味の解析をさせる？とどのつまりは人間の代わりに（そして人間同様に知性的、感性的に）書物を読んでもくれるマシン、ソフトウェアを開発するという夢である。人間が一生かかっても読み切れないだけのテキストを昼夜何の不満も漏らさず、もくもくと、しかも猛スピードで読んでもくれるマシンは実現可能なのだろうか。

コンピュータに意味を解析させていくことの困難さは想像に難くないのだが、自動翻訳の現状が示すとおり、実はこのタイプの研究もかなりいい線までいっていると言えるのである。

思いつくだけでもテキストの意味解析は次のような過程を前提としている。

1. 文レベルのシンタクス分析からその意味分析へと向かうアルゴリズム、この時点で既に文脈、いわゆる「常識」などを参照する必要もある。
2. 文を越えたレベルの構造分析から文を越えたレベルでの意味の分析へと向かうアルゴリズム。
3. 解析モジュールの参照する規則部門、辞書部門、常識推論部門など、それぞれの部門の充実。
4. 各部門での自動学習機能の充実。

「主人公がある目標を達成するために死、もしくは長い眠りを必要とする」といった構造を世界中の文学テキスト、神話、民間伝承などを解析してリストアップする。あるいはもっと具体的に「女性が三角関係に悩んだ末に出家する」という意味的特徴を未知のあるテキストが持っているかどうかを一瞬にして調べたり、この意味的特徴を持つテキスト群があるコーパスの中からすべてリストアップしてストーリーをまとめさせるというようなことも理論的には可能な作業なのである。(残念ながら私の知る限りではそういうプログラムは現存しない。理由は簡単である。およそ金になりそうもないそんなソフトウェアを誰が莫大な時間と労力をかけて開発するだろうか。)

＊現時点でいっても、文レベルで明示された意味的事項の分析や検索なら現存するシステムをすこし手直しすれば可能ならずであり、文を越えたレベルでの意味特徴の分析や検索も、それが「深い」意味ではない限り可能ならずである。しかし文学作品の意味をコンピュータに分析させる場合にももちろん文レベルで留まるわけにはいかないし、明示された意味的単位の間関係性だけで満足するわけにもいかない。

＊以上の理由から意味の複雑なレベル錯綜を取り扱えるようなシステムが必要となってくるのである。

別の言い方をすれば、処理の規則部門を充実させるためにディスクール分

析、テキスト文法、文学記号論といった呼び名で現在呼ばれているものがさらに洗練される必要があるということである。

それに伴って、辞書部門では明示されないものを処理するための知識データベースを作り上げる必要がある。常識とか歴史性、他の無数のテキストといったものがかかわってくるのはいうまでもないだろう。複数のファクトがあるとしたら、そのファクト間の関係性、法則なども含めて準備するというこれもまた膨大な仕事が必要となる。本来、意味と一口に言っても、いわゆる「常識」の投影や含意の問題、テキスト間の相互レファレンスといった（これらはまだしも言語的といえる）問題から、社会心理、深層心理の投影のようなものにいたるまで果てしない広がりがあるのはいうまでもない。

つまり文学テキストを処理するための一種の「科学」がうちたてられなければならないということである... しかし、ちょっと待ってほしい。御存知のようにこの「文学の科学」ということがいろいろといわれた時代があったではなかったか...

この問題に関してフランス文化研究に携わるものが真っ先に思い出すのは有名な批評論争の中でロラン・バルトがレイモン・ピカルルへの反論として発表した「批評と真実」*Critique et Vérité*であろう。どうやらそれがフランスに関して言えば「文学の科学」というようなことを人々が夢見始めたきっかけになったのではないかと思われる。バルトによると「文学の科学」は「内容, contenus=複数」のSCIENCEではなく、「内容, contenu=単数」の「条件, conditions=複数」つまりフォルムのSCIENCEであるということ。この科学がかかわりをもつのは「作品によって生成可能な意味（複数）のヴァリエーション（複数）」だということである。これに関してはバルトははっきりとチョムスキーの言語学をモデルとすると言明しており、「諸作品が汎用性のあるシンボルの言語からある一連の規則的な変形、ロジックによって生み出される」以上、そのロジックを研究しなければならないといったようなことも言っている。（Roland BARTHES, *Critique et Vérité*, Seuil: Paris, 1966 pp.56-58）

どうやらこの「文学の科学」とはもっぱら規則部門の確立をめざそうとしたものであることがわかる。

ロランバルト自身が後に一種の挫折を認めることになった「文学の科学」なわけだが、今日のようにコンピュータが大きなパワーと広大なメモリー空間を持つようになり、しかも莫大な「文学」テキストと「非文学」テキストが社会的フィルターをかけられた上でデータベース化された現在こそ、この「文学の科学」が皮肉にも復活すべき状況が生まれたと言えるかもしれない。こういった意味で「文学の科学」がどこまで実証的でありうるか、つまり現実のコーパスを前にどの程度我々の代わりに仕事をしてくれるかは、実際のテキストデータベースを前にしてそれに基づくシステムがいかにもっともらしい意味分析を提示できるかにかかっている。「文学の科学」がフォルマリズムを標榜する以上はこういったアルゴリズムを作成する上での大きな支えとなるはずであるし、現実のテキストに対しての有効性テストを通してたえず自分自身を修正していく性格のものでなければならぬ。

もし「文学の科学」がまやかしでなく科学であらうとして、それが文学研究といえるなら、テキストDBはその「真面目さ」を試すものになる。逆にテキストDBをよりよく探索、分析するシステムを完成させようと言う努力はこの「文学の科学」もまた「文学研究」であると言う意味でまさしく「文学研究」であると言える。先だって、「テキストDBを使用すること自体が文学研究そのものではない。テキストDBによって文学の言語情報をより柔軟に処理することが文学研究のための新たなプラットフォームを作り出すと考えたほうがよい。」と言った前言はすこし修正することができるかもしれない。

さもないれば「文学の科学」は文学研究のためによりよくテキストを読むための道具にしか過ぎないし、文学研究以前であると言うことも可能なのである。

このことは制度、つまり体制としての文学研究の生産の側に立つ人間に対

していくつかのモラルを提言していると考えることが出来る。

フォルマリスムという口実のもとに必要以上に難解で、難解だけならよいが恣意的で汎用性に欠ける分析を続けながら「文学研究」で食おうとしているとしたら、それは完全にアカデミズムという体制側に立ってしまっているということであろう。こういう研究が、一般の読者にとって、テキストをよりよく味わう上での大きな助けになるとは思えない、一方でフォルマリスムを標榜しながらも、テキストの自動解析にはまったく役立たないといった矛盾に陥る危険がある。

つまり極端に言えばこういう研究は、いかめしいテクニカルタームと理論で武装したアカデミズムという権威の傘のもと、自身の科学性と厳密さを強調しているわけで、それは皮肉にもバルトがかって講壇批評を批判した時のドグマチスムの罠に陥っているといえないだろうか。状況は逆転し、「新批評」的テクニカルタームをふりかざすことが大学人のメチエへの鍵という幻覚すら覚えるのである。一方で真剣にテキストの科学を構築しようとする人々の前では「文学」はその「文学性」ゆえにコンピュータなどで扱える問題ではないということがあったとしたら、「こうもり」の例えは今日でも生きているといえまいか。

最後に現時点で可能でもっとも現実的なテキストDB活用例を以下3つにまとめておく。

1 コーパスDBの語彙的分析

構文、意味分析の不完全さを上手な使い方がされれば十分にカバーできる可能性がある。

2 単に「より柔軟に読む」ための一つの形、テキストをその無数のテキストの錯綜のもとで読み込むためにテキストデータベースを利用する。

・今日よくとりざたされるハイパーテキストの概念がこれに近い。(18世紀アンシクロペディストが夢みたのもまたこのハイパーテキストの概念

に他ならない。残念ながら18世紀は書物に頼らざるを得なかったわけである。)

3 研究文献の語彙的検索システム

内容の自動解析には文学作品の意味分析同様の困難さが伴うが、研究文献のコーパスの語彙検索はその内容に付いて知る手がかりとして相当強力だと考える。少なくとも文学作品に対して語彙分析を行うのに比べればずっと有効なのはいうまでもないだろう。

研究文献のファイル化は光学読み取りシステムの導入によって容易に行うことが出来るはずである。

II. FRANTEXTの利用

以下、91年7月に導入されたばかりのFRANTEXTの新システム(残念ながらまだバグの数が多い)に基づいた主要コマンドを簡単に解説しておく。具体的なマニュアルは本稿掲載時には別途日本語で準備ずみの予定である。メインメニューは8つのコマンド群から構成されており、FRANTEXTにアクセスした際に現れる初期画面は次のようなものである。

MENU PRINCIPAL

- 1 : Selection bibliographique
- 2 : Visualisation du corpus de travail
- 3 : Recherche dans les textes
- 4 : Listes de mots (creation/exploitation)
- 5 : Fichiers (visualisation/impression/effacement)
- 6 : Gestion des processus paralleles
- 7 : Adaptation du terminal
- 8 : Arret de FRANTEXT

このメニューのうちから必要なタスクの番号を指定することによって、それぞれのメニューに対して準備されたサブメニューに移行する。

主なコマンド群（コンピュータに対する命令体系）

コマンドメニュー

1. SELECTION BIBLIOGRAPHIQUE

コーパスの定義，及び指定

このメニューを選択すると以下のようなサブメニューの画面が現れる．

- 1 : Selection par auteur
- 2 : Selection par titre
- 3 : Selection par date
- 4 : Selection par genre
- 5 : Selection par reference bibliographique
- 6 : Reprise d'un ancien corpus
- 7 : Visualisation des textes selectionnes
- 8 : Sauvegarde de la selection dans um fichier
- 9 : Fin du programme de selection

1 - 5 : Selection

作家名（メニュー1），タイトル（2），時代（3），ジャンル（4）といった指標をいろいろな形で組み合わせてあるテキスト群を定義する（つまりコーパスを定義する）．

この時その定義に基づいたテキストのリストも自動作成される．

コーパスを使用者の都合に従ってより柔軟に定義することも可能である．

（既にあるリストからいくつかの作品を除外，あるいは付加する，リストとリストを結合する，リストとリストの交わりを求める，あるいは恣意的に選択されたテキストから新しいリストを作成するなど）

テキストに含まれた表現をもとにコーパスを作成することも可能である。
例えば任意の一表現や表現リストをもとに、それらを含んだテキストのリストを作り出したり、表現リストの中に含まれるある表現を一つでも含むテキストのリスト作成といった複雑な作業も可能。

例：「illusion」を含むテキスト、「ombre, feinte, illusion」のうちいずれかを含むテキスト...

6 : Reprise d'un ancien corpus

メニュー 8 によって以上のように作成したコーパスに名前をつけ、ファイルとして保存することが可能であるが、逆にメニュー 6 によって過去に作成した一つ、もしくは複数のコーパスのうちで実際に仕事の対象となるものを再び取り上げることができる。

インデックス作り、コンコルダンス作成、表現の出現頻度の統計化といったテキスト分析のための諸作業はこうして選ばれた作業コーパスに対して行われる。作業コーパスとして何のファイルも指定しなかった場合には暗黙裏に一番最近定義したコーパスが作業用のコーパスとなるようである。

7 : Visualisation des textes selectionnes

メニュー 7 を選択するとコーパスに含まれるテキストのリストが表示される。あまり長い場合はコントロールキーを押したまま C の文字を打つことによって表示を中断することが出来る。このコントロールキー + C はブレーク信号となっているので全てのタスクを途中で中断するときに使われる。

8 : Sauvegarde de la selection dans un fichier

以上のように作成したコーパスに名前をつけ、ファイルとして保存することが可能である。

9 : Fin du programme de selection

このサブメニューを抜け出してメインメニューに戻る。全てのメニューにおいてその階層から抜け出すための（つまり終了のための）コマンドは一番下，メニュー番号で言うと一番大きい数字で表示される。

***GENRE** (ジャンル) 及び **DOMAINE** (領域) については以下のものの内から指定が可能となっている。

GENRE (ジャンル)

CORRESPONDANCE, ELOQUENCE, ESSAI, MELANGES LITTERAIRES, MEMOIRES, PAMPHLET, POESIE, PROSE, RECIT DE VOYAGE, ROMAN, THEATRE, TRAITE, VERS

DOMAINE (領域)

ADMIN. PUBLIQUE, ARTS, ASTRONOMIE, BATIMENT, BIOLOGIE, CHIMIE, CRITIQUE LITTERAIRE, DROIT, ECONOMIE, ENERGIE, ETHNOLOGIE, HISTOIRE, INDUSTRIE INFORMATION, LINGUISTIQUE, LOISIRS, MATHEMATIQUES, MOEURS, OCCULTISME, PHILOSOPHIE, PHYSIQUE, PSYCHOLOGIE, RELIG. SOC. SECR., SC. DE LA TERRE, SPORTS

***コーパス選定時でアステリクスを使用することは一つのデータを与える代わりに複数のデータリストを与えることを意味する。**

例：a=Camusとした場合はカミュ人を作家として指定することになるが，a=*****とした場合は複数の作家リストを指定したいという意味になるのでコンピュータは次に作家のリストを定義するように問い返して来る。

2. VISUALISATION

このコマンドを利用してコーパスの内容を確認表示することができる。

VISUALISATION SOMMAIRE (コーパスの内容をテキスト数と単語数のみの表示)

VISUALISATION DETAILLEE (コーパスに含まれるテキストのリストを具体的に表示)

3. RECHERCHE DANS LES TEXTES

テキスト検索のためのコマンド

ある表現、あるいは表現リストを指定した上で、いろいろな条件に従ってコーパスに対して検索をかける。この際その表現の含まれる文脈（この大きさも指定可能）がリストアップされ、同時にその表現の含まれる作品のレファレンス、および表現の見つかった位置を明記した参照リストも作成される。

任意の表現、あるいは表現リストにつき、コーパス中での出現頻度を計算したり、インデクスを作成することもできる。

検索したい表現 (composant) の設定法

このメニューを選ぶとシステムは直ちに検索したい表現を指定するように求めてくる。最も単純な設定法は1単語、もしくは1表現を完全な綴りで与える方法である。

検索したい表現 (composant) の設定時でアステリクスを使用することは一つのデータを与える代わりに複数のデータからなるリストを与え、その中の任意の表現を検索することを意味する。

例：espritとした場合はespritという単語を指定することになるが、*とし

た場合は複数の単語によって構成される単語リストを指定したいという意味になるのでコンピュータは次に単語のリストを定義するように問い返して来る。

完全な綴りで検索表現を指定する以外に単語の前におく次のような特殊記号があって検索をより柔軟なものにしている。

&l リスト &l vins “vins” という予め作成されたワードリストを指定

&q 任意の一語 de toutes &q forces “de toutes” + 任意の 1 単語 + “forces”

&c 動詞活用 &c pleurer “&c” の後に動詞の原型（例えば “pleurer”）をおくとその全ての活用形を検索できる

&t ジョーカー &t %ique, &t anti%isme “%” はジョーカーとした任意の文字列の位置を示す。使用例はそれぞれ 任意の文字列 + “ique”, 及びに “anti” + 任意の文字列 + “isme” を表わしている。

^ 除外マーク le^genre masculin le + “genre” 以外の任意の単語 + “masculin” という意味。

次の特殊記号は一般に単語の後に置き単語の位置や特性の指定に使う。

\$L) 行末 plan\$L) 行末の plan という単語

\$P) 頁末 plan\$P) 頁末の plan という単語

\$F) 文末, 文頭 pourquoi\$F) 文末の pourquoi \$F) pourquoi 文頭の pourquoi

\$N) 固有名詞

\$I) イタリック

検索したい表現 (composant) が 1 つ設定されるとシステムはこれと併せて検索したい次の表現を聞いて来る。

composant 2:

2 つ目の検索表現を設定するときは前回同様にする。

それが終わるとさらに 3 つ目を聞いて来るのでそれ以上設定する必要のないときは単にリターンキーをうって確定すればよい。

composant 3:

複数の検索表現を指定したときはその間の位置関係の指定を聞いて来るのでこれを指定することができる。

例:

1)2 表現 1 が表現 2 の前にあるケースを指定。

2<1 上と逆のケース。

1)2,4 表現 1 が表現 2 の前にありそのあいだの最大距離が 4 語を越えないケースを指定。

検索表現が設定されるとシステムは次のような文で検索結果を表示する際の文脈の長さの指定を求めてくる。

La largeur du contexte restituée est égale à une phrase par défaut
Voulez-vous un contexte plus large (o/n):

デフォルトの値は 1 文なので、それでよい場合は O (oui の省略) と答える。独自に文脈を指定したければ N として続く質問に答えて行けばよい。

検索結果の表示 (VISUALISATION)

検索の条件が決定するとシステムは結果の表示方法について次の 2 つから選ぶように求めてくる。

Voulez-vous

1 : Une visualisation immediate des resultats

2 : Une visualisation differee des resultats

Indiquez votre choix (1 ou 2) :

1 : Une visualisation immediate

検索に応じてリアルタイムに結果が表示される。画面への書き込みの文だけ時間の無駄であるので通信料、使用料の制約がある日本での使用には勧められない。

2 : Une visualisation differee

コンピュータが検索を終了した時点で結果を表示する。

このメニューを選ぶと次のような作業が可能という利点がある。

***結果の項目ごとの表示**

***番号のふられた結果項目をその番号を指定して自由に呼び出す。**

***結果項目を作家名のアルファベット順、時代順などに応じて並べ変える。**

***結果項目の中から必要なもののみを選び出したり、不要なものを削除。**

結果を. RESという拡張子をもったファイルに保存できる。**

検索が開始されと次のような画面が現れる。

*****POSSIBILITE DE PROCESSUS PARALLELE*****

10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%

---- I ---- I ---- I ---- I ---- I ---- I ---- I ---- I ---- I

終了すると

Recherche terminee. Number de solutions trouvees : 66

という風にいくつかの例が見つかったかを表示し、検索結果を表示するかど

うかをたずねてくる.

Vous pouvez :

1 : Visualiser les resultats

2 : Arrêter le programme

Indiquez votre choix (1 ou 2) :

ここで2と答えると折角の結果が表示されないので1を選ぶと次のような画面が現れる.

これが検索結果の第1例である.

Ex. 1 (Selec.) --Ex disponibles 66 --Ex. selec. 66

Q665/REGNIER.M / LES SATIRES 1 A 13 / 1689

pages 47 / SATIRE 5

auster<re en ses fac__ons, se've<re en ses propos,
qui dans un labeur juste esgayoit son repos,
d' hommes vous faisant dieux, vous païssoit d' ambrosie
et donnoit place au ciel a< vostre <fantasie>.

?-aide s-suiv. p-prec. r-revoir i-increment n-voir-num. o-oter O-oter__to-
utg-garder G-tout__garder e-echant, Z-zoom__AV Z-zoom__AR a-archiv.
f-fin t-tri

画面の下に現れるメニューからs-suiv.を選ぶと次の例が現れる. Z-zoomを選ぶと検索表現の含まれる文脈がズームのように拡大される. t-triは結果を並び変えるときに使う. ?-aideでヘルプが表示され, f-finで終了である.

4. LISTE DE MOTS

単語リストの作成, インデックス作成等の単語についての作業

OPERATIONS SUR LES LISTES DE MOTS

1 : Editeur de listes de mots

2 : Conjugaison d'un verbe

- 3 : Extraction du vocabulaire
- 4 : Extraction du vocabulaire (avec indication des frequences)
- 5 : Index des mots d'une liste
- 6 : Calcul des frequences d'un mot ou des mots d'une liste
- 7 : Distribution des frequences d'un mot ou des mots d'une liste
- 8 : RETOUR AU MENU PRINCIPAL

1 : Editeur de liste de mots

任意に単語リストをつくる.

2 : Conjugaison d'un verbe

動詞の活用リストをつくる.

3 : Extraction du vocabulaire

あるコーパスで使用されているある基準に従った単語のリストを作成.

4 : Extraction du vocabulaire (avec indication des frequences)

上記のリストをその使用頻度表と共に作成.

5 : Index des mots d'une liste

指定した1つあるいは複数の単語 (単語リスト) でインデックスを作成.

6 : Calcul des frequences d'un mot ou des mots d'une liste

指定した1つあるいは複数の単語 (単語リスト) の使用頻度表を作成.

5. F I C H I E R (VISUALISATION/IMPRESSION/EFFACEMENT)

ファイル (FICHIER) の操作

GESTION DES FICHIERS

- 1 : Visualisation d'Un fichier. mot ou. asc
- 2 : Editeur de contextes (fichiers. res)
- 3 : Expansion d'un fichier. res en fichier. asc
- 4 : Impression d'un fichier. asc ou. mot au centre serveur
- 5 : Liste des fichiers existants
- 7 : RETOUR AU MENU PRINCIPAL

各作業につき、ホストコンピュータ側に以下のような拡張子を持ったファイルを作成することができる。

- ***.mot** 単語リストの保存されるファイル
- ***.cor** コーパスの保存されるファイル
- ***.res** 検索結果が圧縮された形で保存されるファイル
- ***.asc** 圧縮された検索結果が解凍されたファイル

1 : Visualisation d'un fichier. mot ou. asc

このメニューによりファイルの中身を覗くことができる。

2 : Editeur de contextes

圧縮された検索結果のファイルの内容を表示して、次のような様々な操作を加えることができる。

- *検索文字列の含まれるコンテキストをズームで広げる。**
- *検索結果の項目ごとの表示**
- *番号のふられた結果項目をその番号を指定して自由に呼び出す。**
- *結果項目を作家名のアルファベット順，時代順などに応じて並べ変える。**
- *結果項目の中から必要なもののみを選び出したり，不要なものを削除。**
- *以上の結果を***.RESという拡張子をもったファイルに再び保存できる。**

3 : Expansion d'un fichier. res en fichier. asc

圧縮されたファイルはそのままでは印刷などできないのでこのコマンドで解凍する。

5 : Liste des fichiers existants 現存している全てのファイル名を表示

6 : Destruction de fichiers ファイル削除

*SORTIE 検索結果を単に画面に出力するか、ファイルに出力するか、もしくはその双方に出力するかを指定する。(ブレーク信号を送信した後でこのコマンドを出すことができる点で他のコマンドと異なる。) 作業結果をファイルとして保存したい場合は当然このコマンドでファイル出力を指定する必要がある。

AFFICHER ファイルの内容を覗きたいときに使う。

IMPRIMER ファイルの内容をプリンターに出力したいときに使う。

CONJUG ある動詞の活用系を調べるときに使う。

6. GESTION DES PROCESSUS PARALLELES

いわゆる、バックグラウンド処理(並行プロセス)の管理

91年7月から導入された新システムの目玉的機能と言える。巨大なコーパスに対する検索、結果の印刷等時間のかかる処理をバックグラウンドで行いながら同時進行的に(マルチタスク)別の仕事を行うことができる。特に日本などの遠隔地からアクセスしている場合はこの助けをかりると通信費、使用料とも大きな節約ができる。

任意の作業を開始した時点でブレーク信号(CTRL+Cで得られる。)を入力するとARRET(停止)、REPRISE(再開)と同時にCONTINUER EN PROCESSUS PARALLELE(バックグラウンド処理=並行処理での作業継続)というオプションが現われるのでこれを選択することによってバックグラウンド処理が得られることになる。検索作業の場合には結果が保存されるファイル名を聞いて来るのでそれに答える必要がある。

メインメニューの6.GESTION DES PROCESSUS PARALLELESを選択するとどういった並行処理が継続中であるか、どんなファイルに結果が保存されているか等を知ることができる。

7. ADAPTATION DU TERMINAL

使用している端末機の設定。一般に日本の主なコンピュータではこのメニューは使う必要がないのでここでは触れない。初期設定のままで使って問題がない。

8. ARRET DE FRANTEXT

フランテクト終了のためのコマンド。このメニューを選ぶとシステムは確認を求めて来るのでそれにはO(oui)と答えればよい。それに続いて使用中の通信ソフトを終了することによって完全に通信が終了する。